

ラジオNIKKEI ■放送 毎週木曜日 21:00~21:15

マルホ皮膚科セミナー

2016年1月14日放送

「第31回日本臨床皮膚科医会 ①

大会を終えて」

網走皮膚科クリニック
院長 川嶋 利瑞

はじめに

2015年6月20日、21日の両日、第31回日本臨床皮膚科医会総会・臨床学術大会を、網走市のオホーツク文化交流センターおよび網走セントラルホテルにて開催しました。道東のオホーツク地区での開催にもかかわらず、700名余りの方に全国からお集まり頂き、無事に大会を終了できました。

日本臨床皮膚科医会は、全国10ブロックに分かれて活動をしており、総会・臨床学術大会も各ブロック持ち回りで開催されて来ました。ここ数年は、大阪、福岡、名古屋、横浜での大都市での開催が続いていました。北海道ブロックでは、過去2回開催されていますが、いずれも札幌市での開催でした。そのような中、第31回の総会・臨床学術大会を道東の人口4万人の地方都市で開催するというのは、大きな冒険でした。会長の若林先生を始めとする本部役員の方々には網走市での開催をお許し頂き、心より感謝申し上げます。

第31回
日本臨床皮膚科医会
総会・臨床学術大会

テーマ
「連携～診療科の枠を超えて」

2015年
6月20日(土)・21日(日)

■会場 / オホーツク文化交流センター(エコーセンター2000)
網走セントラルホテル

■会場 / 川嶋利瑞(網走皮膚科クリニック)

株式会社コンベンションワークス
001-0027札幌市北区北27条西15丁目6-3
TEL 011-727-7740 FAX 011-727-7739

<http://www.conv-s.com/jocd31/>

今大会の概要

まず特別講演として4人の演者をお願いを致しました。土曜日の午前には、日本医師会常任理事の小森先生に、総合診療専門医について、と題してご講演を頂きました。専門細分化されている現在の日本の医療の現状、人口減少、高齢者の増加などの社会的変化に対応したこれからの日本の医療の在り方に関して、分かり易くご講演頂きました。

続いて、午後には日本臨床皮膚科医会副会長の矢口先生から、平成28年度診療報酬改定に向けて、というタイトルでご講演を頂きました。次回の改訂に向けての日本臨床皮膚科医会としての活動内容についての詳しい説明がありました。診療報酬の改訂は我々臨床皮膚科医にとって、大変注目されている事であり、平成28年度の診療報酬改定の結果も注目したいと思いました。

日曜日には、厚生労働大臣官房企画官・保健局医療課の佐々木先生から、今後の医療保険施策の動向について、というタイトルで特別講演をお願いしました。高齢化に伴い医療費増加による医療保険財政への影響が懸念され、今後は費用対効果なども考慮しながら診療報酬改定も行われるべきであるというお話でした。

土曜日の夕方には、に、夢は努力でかなえる、と題して特別講演をお願いしました。葛西選手は2015年に世界最年長でのワールドカップ優勝記録を塗り替え、43歳の今シーズンも、世界最年長のスキージャンプ選手として活躍中です。幼少の頃のご苦勞、ご家族の病気など、幾多の困難に努力で打ち勝ち、現在までの素晴らしい記録を残してきたご自身のお話を、時にはユーモアも

交えて、大変聞きやすいお話をして頂きました。不惑を過ぎてもお世界の第一線で活躍を続けるには、人知れない努力の継続があったという話を聞いて、私自身も勇気を頂き、励みになりました。



会頭挨拶



日常の臨床で数多く遭遇する疾患などについて、経験豊富な専門家からじっくりと解説してもらい、明日からの臨床に役立ててもらおうと考え、4つの教育講演を企画しました。

飯塚先生には、飯塚一コレクションと題して、専門の乾癬に留まらず、サルコイドーシス、皮膚筋炎、接触性皮膚炎など非常に示唆に富む症例を供覧、解説していただきました。



飯塚一先生

熊切先生にはホクロ（色素性母斑）を診断する、と題しての講演をお願いしました。悪性黒色腫との鑑別診断のポイントなどについて分かり易く解説して頂きました。

近年分子標的薬を始めとして、次々と新薬が登場し、それに伴い皮膚科医が知っておくべき薬疹の知識も増える一方と思われます。薬疹の診断治療の最前線と題したセッションでは、重症薬疹の診断治療および最近の新しい薬疹の知識について詳しく解説して頂きました。

また、オフィスでの皮膚外科治療のコツと題して、皮膚科医および形成外科医のお二人の先生に、実践で役立つ皮膚外科のコツについて解説して頂きました。

一般演題・シンポジウム

今年是一般演題として77題の演題を頂きました。興味深い症例提示、優れた臨床研究、様々な統計的観察など、大変興味深い演題が集まりました。最近の本大会と同様に、すべての一般演題はポスター発表でお願い致しました。また参加者の投票により3名の優秀ポスター賞を決定し、懇親会で表彰を行いました。

シンポジウムは9セッションを企画しました。本大会のメインテーマを「連携」としたのは、皮膚科の診療も細かい分野に細分化、専門化される中、日常の診療においては皮膚科単独で解決するのが難しく、関連する他科の医師と連携して診療に当たる必要がある症例が増えているのではないかと考えたためです。そのため皮膚科以外の科の先生にも多くの講演をお願い致しました。

膠原病の診断と最新治療のセッションでは、埼玉医大の土田先生から膠原病の皮膚症状と診断について講演頂いた後、内科医の立場から、それぞれのご専門の先生に全身性エリテマトーデス、全身性強皮症、多発性筋炎、皮膚筋炎について、診断とともに最新の治療法について専門的に解説して頂きました。皮膚科の学会ではあまり聞く機会の少ない貴重な情報を得られたものと思います。

また、日常の診療において、しばしば遭遇する下腿潰瘍ですが、糖尿病、末梢動脈疾患などの基礎疾患を有していることが多く、保存的治療にしばしば抵抗性であり、非常に苦勞す

る疾患の一つと言えらると思ひます。北海道大学形成外科の山本先生に座長をお願いし、循環器内科、形成外科、透析医の先生から、それぞれカテーテル治療、外科的治療、透析治療の適応、有効性について、豊富な症例提示を交えて解説して頂きました。

神経線維腫症は、診断はついてもその後のフォローに苦勞する疾患であると思われまふ。神経線維腫症(Ⅰ)の診断と治療のセッションでは、分子遺伝学の立場から遺伝子診断の現況を解説して頂き、東京慈恵会医科大学の谷戸先生に疾患の臨床、診断について講演を頂きました。引き続き整形外科医、小児科医の立場から患者をフォローするに当たり留意すべき点等について、詳しく解説して頂きました。

近年の医療の進歩、医療情報の氾濫などに伴い医療事故あるいは医療訴訟の数も増加しています。そこで、これからの皮膚科医療訴訟を考へるといふセッションを企画しました。北海道大学医療安全部の南須原先生にリスクコントロール、リスクマネジメントについて、クイズ等も交えたユニークな講演を頂きました。群馬大学の永井先生には、皮膚科医であり、大学病院の医療安全管理部長であるといふ立場から、皮膚科の日常の診療の場でのトラブルについて具体的な症例を交えて講演して頂きました。続いてはと総合法律事務所坂本先生には、弁護士の立場から、実際の裁判の症例も交え、診療録の記載方法などの細部にわたり、詳しく解説して頂きました。

本邦でも年々アレルギー性疾患の患者が増加しているといわれています。皮膚科領域での代表的なアレルギー性疾患と言へば、アトピー性皮膚炎ですが、他科領域のアレルギー性疾患が合併している事も多く、アレルギー疾患の最新治療と題したシンポジウムを企画しました。それぞれの領域のアレルギーご専門の先生にアトピー性皮膚炎、アレルギー性鼻炎、喘息、食物アレルギーについて、最新の治療について、研究段階の治療の情報なども交えて講演して頂きました。これからのアレルギー性疾患治療の進歩の一助となったのであれば幸いです。

日本臨床皮膚科医会では、多くの部会に分かれて活発に活動を行っています。本大会では、勤務医、学校保健、在宅医療のそれぞれの委員会の先生に中心になってもらい3つのシンポジウムをそれぞれ企画しました。各分野の現状および今後の課題が浮き彫りになったセッションであったと思ひます。

本大会での新しい試みとして、日曜日の午後に「これからの乾癬に対する生物学的治療」と題したジョイントシンポジウムを企画しました。演者には乾癬治療のエキスパートの先生お二人に加え、患者さんの代表の方にも講演して頂きました。またこのセッションの会場内には患者さんでも希望があれば自由に入場してもらい、乾癬治療の今後について患者さんとともに議論してもらいました。これからもこのような形のセッションが行われることを希望致します。

最後になりましたが、今回の学会が参加された皆様にとって、心に残る学会であったことを祈るばかりであります。